

●群馬県住民参加型在宅福祉サービス団体連絡会

教育最前線

連載 39

利用者の方々への責任と配慮を深め、送迎への安全意識と行動を変えていくために

運転演習では講師を務める新井洋さん(写真右)が受講者に問いかけ、考えてもらうプロセスを取り入れた指導を実践



群馬県住民参加型在宅福祉サービス団体連絡会(以下、連絡会)は、社会福祉法人 群馬県社会福祉協議会の中に事務局を置き、福祉サービス送迎運転者講習会を県内6地域で開催している。

2月9日に連絡会が群馬県高崎市で実施した同講習会で、ホンダの福祉関連全運転教育プログラムの1つ「移送安全運転プログラム(以下、移送プログラム)」が取り入れられた。連絡会の事務局担当である社会福祉法人 群馬県社会福祉協議会地域福祉課の岡部基子さんは「3年前から講習会を始めましたが、これまでは講義とシミュレーター等による適性検査が中心だったため、受講者からはより実践的な内容を求める声が高まっていた。そうしたニーズに対応したいと考えていたところ、ホンダの移送プログラムのことを知り、運転演習(実技)」として取り入れることにしました」と話す。

そして昨年10月、ホンダの交通教育センターのインストラクターが講習会担当者を対象に移送プログラムの体験会を実施した。連絡会とともに、高崎市内での講習会を共催する認定NPO法人じゃん



ブレーキ訓練では発進・停止を繰り返し、同乗者に優しいアクセルとブレーキの操作を身につけてもらう



ジグザグに並べられたパイロンの間を通り抜けながら、車体の揺れをできるだけおさえるためのハンドル操作を練習する



車庫入れなどでバック走行における安全運転のポイントを再確認してもらう

型在宅福祉サービス団体連絡会と認定NPO法人 じゃんけんぼんが主催する講習会の運転実技の講師として活動しており、10月の移送プログラムの体験会に参加している。

運転演習では、まず受講者の代表者に運転席に座ってもらい、正しい運転姿勢を解説。その後、目印になるものをクルマの周囲に置き、前後輪やフロントバンパーの延長線が運転席から、どのように見えるかを確認。これらを把握することによって、そのクルマの車両感覚が身につけられることを新井さんは説明した。

今回の講習会受講者は21名。2つのグループに分かれ、交互に講義と運転演習を受講する。運転演習は医療法人二之沢会の駐車場で、送迎で利用する車両は新井さん。新井さんは、群馬県住民参加

利 用者の方々に配慮した運転操作を身につけてもらう

「考えることで、現場での実践につながるプログラムとなっています」と青木さんは移送プログラムを評価する。

続いて、ブレーキ訓練。新井さんは「急ブレーキをかけた際に何km/hまでなら、座席で自分の身体を支えられると思いますか」と受講者に質問する。5〜30km/hと答えは様々。この後、受講者一人ひとりがクルマに乗って課題に取り組む。課題は5m間隔に並んだパイロンに合せて発進・停止を繰り返すというもの。運転しない受講者は助手席や後席で、背もたれから背中を浮かせて座り、ブレーキをかけた時に自分の身体を支えられるかを確認してもらう。訓練中の速度は5km/h程度だったが、自分の身体を支えられないことを体験。「一時停止標識のある場所で、このように少し前進して停止することを繰り返すことがあります。こうした時に、利用者の方々には負担をかけないようにブレーキ操作を身につけてください。また発進する際も、

けんぼんの青木武紀さんも、この体験会に参加。「一方的に『こういう方法があります』という指導ではなく、受講者自身に普段どのような運転をしているか考えさせる点、それをふまえて課題に取り組める点が良いと感じました。福祉サービス全般で求められるのは状況に合わせた判断です。『考える』というプロセスはたいへん意義があると思います。主体的



運転席から前輪やバンパーの延長線がどのように見えるかを把握することが、車両感覚をつかむ目安になることを理解してもらう

徐々にアクセルを踏んでショックを少なくするようにしましょう」と、新井さんはアドバイスし、受講者はブレーキ訓練を繰り返す。

次はハンドル操作。ジグザグに並べられたパイロンの間を通り抜けるというもの。ハンドルを大きくきくと車体の揺れが大きくなることを理解してもらう。そして、車体の揺れをできるだけおさえるためのハンドル操作を身につける。この他、バック走行(車庫入れ)などにも取り組み、140分にわたる運転演習は終了した。

新井さんは「受講者の方々には送迎を担当しているドライバーなので、自分の普段の運転を振り返ると同時に、同乗者の方のことを意識して運転の準備や操作ができるような指導を心がけました。受講者に問いかけながら進めるという手法は効果があると思います」という。

送 迎は介護における大切なサービスの1つであると感じてもらおう

「今回、皆さんが体験した内容は、広大なスペースがなくても実施することが可能です。各事業所に戻ってから駐車場等を利用して、ぜひ職場の同僚にも伝えていってほしいと思います」と受講者に訴えた。

送迎経験10年という女性は「運転に関する実技講習は免許取得時以来です。課題を聞いた時は簡単だと思いましたが、意外に苦労しました。切り返しの際に無駄なバックをしているなど、自分では気づけない点に気づくことができ、充実した講習だったと思います」と感想を語った。また、これから送迎を担当する予定だという男性は「大きいクルマの運転に自信がなかったので受講するために必要なことが学べたと同時に、送迎は介護における大切なサービスの一つであることを再認識しました」と話す。

この福祉サービス送迎運転者講習会には、ホンダカーズ群馬中央・桐生バイパス店が継続的に協力している。ホンダの福祉車両を会場内に展示し、その特長を同店スタッフの小池高史さんらが受講者に説明した。小池さんは「福祉関係の皆様にホンダの福祉車両について知っていただきたいと思い、協力しています。今回の移送プログラムを取り入れた講習会は、私たちにとても良い勉強の機会となりました。私たちも、お客様との話の中で安全運転について伝えていこうと思っています」と話す。

ホンダは、この群馬モデルを他地域にも展開することで、介護施設や病院などへの送迎サービスを提供する団体等への安全運転教育をさらに広げていく考えだ。



特定非営利活動法人全国移動サービスネットワーク理事の山本憲司さんによる講義



講習会に先立ち、群馬県警察本部交通安全教育隊による「安全運転講座」も開かれ、群馬県内の送迎中の交通事故例とその対策について解説



Honda Cars 群馬中央・桐生バイパス店のスタッフが会場内に展示されたHondaの福祉車両の特長を受講者に説明